**「自分と他人を理解する道を求めて」　　　2015年２月21日（土）**

**吉田章宏**

**「経路を語って、独り楽しむ」：「説いて知らせようとする」に優り、「響きを生ずべき急所をうって、響きを聞こうとする」に劣る。「共に育ちましょう」　蘆田恵之助　「教育は共育」。**

**「教育とは、教えないことだ。教えたいと思うことを、惜しんで惜しんで、惜しみぬくことだ。」**。**武田常夫『真の授業者をめざして』国土社**

William Blake　の詩：　**To see a World in a Grain of Sand／And a Heaven in a Wild Flower,／Hold Infinity in the palm of your hand／And Eternity in an hour. William Blake**

**神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、著作集１．1981、ｐ268．**

**神谷美恵子『こころの旅』みすず書房、著作集３．1982．ｐ103、131、141、146、151－152.**

**主題「自分と他人を理解する道を求めて」：**「自分」（＝主我と客我）、「他人」（＝非我）、「自分と他人」（＝人間）、「を」（対象化）。「理解する」（＝説明と理解、「わかる（分かる、解る、判る）」）。「道」（＝方法、method=meta(…の後)-hodos（道）（道を追う、筋道を追う））。「求めて」（＝未だ見つかっていない、未だ、探し求めている。）

**学者の悲劇**

　「**学者悲劇**とは、**学者であるがゆえの悲劇です。自分は学者として世界のすべてを知りたいと思う。しかし、人間である以上、世界のすべてを知り尽くすことはできない。**これが学者悲劇の基本形です。…。しかし、ここに学者の出会うもうひとつの悲劇があります。それは、**学問によって仮にすべてを知りえたところで、それが自分の人生にとっていったい何の意味があるのだろうかという疑問にとらえられてしまう悲劇です**。それは知識が自分の人生に対し持つ意味を問う点で、単なる学者悲劇を超え、生の意味がどこにあるかを問う人間存在一般の悲劇となっています。」（100－101）

「ファウストの望むのは即ち、個別的知識ではなく世界の根源についての原理的知であり、静止した対象についての知識ではなくカオスと運動としての世界をそのまま把握する動的知です。そして、そのことから、知の主体たる人間と知の対象たる世界の関係も根本的に変わります。即ち、世界を自分の向う側に置いて、その調和を観照的に知るのではなく、カオスであり運動である世界のなかに自らの身を置き、自らの肉体存在によって世界を直観的に知ろうとするのです。・・・。そして、すべての人間が否応なしに世界内部の存在である以上、世界の調和を上方から観ずるのは神のみに許された立場であり、人間の真実の知は、カオスのなかでの直観的知としてのみありうる。個別的知識ではなく、そうした動的にして原理的な知のみが、人間の存在の意味を充たしうる実存的知である―――それが、地霊に出現を呼びかけた時のファウストを揺り動かしている思いでありましょう。」（柴田翔著『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波書店、1985年、101－102）

**では、私は、人間についてのどのような知を求めているのか。その自覚さえなくて、どうする。**

　学問の求めているのは「真理」であろう。そして、私が、心理学者であるとの自覚を持つとするならば、求めているのは「心理の真理」であろう。だが、・・・、

　「ギリシャの伝統とヘブライの伝統における真理概念の根本的な相違・・・、『**真理概念の二つの構造様式』**について語り、それを『鏡』と『巌』と名付けている。一方のギリシャ的な真理概念・・・、真であるのは・・・与えられた事実についての正しい言表である。それゆえ・・・**鏡としての真理**について語るのである。これに反してヘブライ的な真理概念では、・・・、真理とは根源的な意味において一つの存在態勢である。・・・、それはある物またはある人間の、そして当然また神の信頼性を表わす。それは『人がそれのゆるがぬ持続を信じているとことの一切のものに認められる・・・。』これの象徴が支えとなる**巌**である。」　O.F.ボルノー著、西村皓・森田孝訳『真理の二重の顔』理想社　13－14　「認識真理への問いも結局は道徳的な問題に帰着する」「認識真理とより深い存在真理という二つの真理概念」16

　私は、**「鏡」を求めているのか、「巌」を求めているのか。もちろん、両方。だが・・・。**

## 智慧（ちえ、仏語）「世界大百科事典内の智慧の言及　【知恵】より：…知恵は現実のさまざまな現象を識別するとともに，それを統合して理解するはたらきであるために，現実の感覚的なはたらきを超えて，全体を把握する超越的な意味も含んでいる。仏教では知恵をものごとの識別に使われる智(ジュニャーナjñāna)と，統合的で識別的な機能を超える[般若](https://kotobank.jp/word/%E8%88%AC%E8%8B%A5-118535#E4.B8.96.E7.95.8C.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E4.BA.8B.E5.85.B8.20.E7.AC.AC.EF.BC.92.E7.89.88)の智慧(プラジュニャーprajñā)とに分けて考えた。また，先天的に備わっている生得慧，他人の教えから得られる聞所成慧，内的思索によって得られる思所成慧，修行の実践の中で得られる修所成慧の4種類に分類している。…」

## 「生得慧」、「教えを聞いて了解する智慧：聞慧（もんえ）」、「道理を思惟して生ずる智慧：思慧」、「修行の実践の中で得られる智慧：修慧（しゅえ）」。「聞思修（もんししゅ）」（沙石集）

**現象学の祖・フッサール“Zu den Sachen selbst!””To the things themselves!” 「事柄そのものに！」（これは、いまにして思えば、「鏡」としての「知恵」を求めて居るように思われる。もし、それを超えて、「巌」としての「智慧」を求めるとすれば、何処にどのように求めるか？**

**心理学では、研究されるのも人間、研究するのも人間、これが、心理学の学問としての、大きな特徴である。そこから、心理学の多種多様性も生まれる。その基礎に、「人間とは何か？」という問いがある。しかも、この問いは、意識されたり、しなかったりしている。（吉田章宏）**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

William James: *Principles of Psychology.*「世界の分割線」**淑徳大学大学院研究紀要　第９号　2002**　ｐ.50　“me” and “not-me” :**「全宇宙の二つの部分への巨大な二分割**」（吉田ホームページ所載）

人間は、誰でも、この大宇宙で唯一無二の大分割をしている、唯一無二の独自な存在である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

**ハイデガーの言葉**「現存在の存在とは、『（世界内部的に出会する存在者）の許に在ることとしての既に（世界）内に在りつつも自己に先立つこと・（世界内部的出会存在者のもとでの）現滞在としての既在（世）的自己予在、Sich-vorweg-schon-sein-in- (der-Welt) als Sein-bei (innerweltlich begegnendem Seienden)』を意味する。」（『存在と時間』松尾啓吉訳、上下、勁草書房、上巻、193ページ。）　「現存在の存在論的構造全体の形式的に実存論的な全体性は、次のような構造においてとらえられなければならない。すなわち、現存在の存在は、[世界内部的に出会われる存在者]のもとでの存在として、おのれに先んじて[世界]の内ですでに存在している、ということを意味する、と」（『存在と時間』原拓・渡辺二郎訳、世界の名著７４、中央公論社、332）

“The formal existentical totality of the ontological structural whole of Da-sein must thus be formulated in the following structure: The being of Da-sein means being-ahead-of –oneself-already-in (the world) as being together-with (innerworldly beings encountered). (“*Being and Time*” Translated by Joan Stambaugh. SUNY press.1996, p.179-180)

**現象学：渡辺二郎の言葉「真の現象学は、筆者の考えによれば、『自己を見ることが世界を見ることであり、世界を見ることは自己を見ることである』という根本態度に帰着するものである。自己の存在の奥底を見ることは、結局、内面性の究極構造をみることであり、これを見つめるとき、一転して、世界が、意味と無意味の交錯として成立することを見るころになろう。」**（『内面性の現象学』、勁草書房、１９７８年、21－22）

**「『彼らの言うことを聞くな、彼らが行っていることを見よ』・・・、話題となるためにではなく、実行されるためにある、そのような事象が存在するのだ。・・・、ツェノンが言っていることを聞いてはならない、むしろアキレスが行っていることを見よ！・・・聖人と英雄がその隣人に働きかけるのは、文人のように自分が書いたことによってではないし、また、講演者のように自分が語ることによってでもない。自分たちが行ったこと、さらには自分たちがどのようにあるかによって、彼らは隣人に働きかける。自分たちの人生を模範として示すことによって、自分たちの姿から発する詩的な輝きによって、である。」（87）「バルザックが言っていることだが、雄弁な説教師たちはわれわれの意見を変えはするが、われわれの行動を変えはしない。言い換えるなら、納得させることなく説得するのだが、それに対して、行動する人間、英雄と聖人と詩人だけが彼らに倣いたいという気持ちをわれわれに起こさせる。われわれが高潔を手にするのは、高潔を説き勧めることによってでなないのだ！　というのも、説教することで得られるのは体のよい同意だけだからである。」（V.ジャンケレヴィッチ著、合田正人訳『最初と最後のページ』みすず書房、1996年、88）**

　前述の**「智慧」（「統合的で識別的な機能を超える**[**般若**](https://kotobank.jp/word/%E8%88%AC%E8%8B%A5-118535#E4.B8.96.E7.95.8C.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E4.BA.8B.E5.85.B8.20.E7.AC.AC.EF.BC.92.E7.89.88)**の智慧」**）は、現象学的心理学が求める「意味と構造」、＜「識別」と「統合」＞に対応するか、と思われる。「統合を介した分析」とか、「統合による分析（analysis-by-synthesis）」も、以上の「知恵」／「智慧」（wisdom）観には届かないが、そこに通じている、と思われる。分析、分節化、に留まる「知恵」ではなく、「分析と統合」を超えて、「綜合を介した分析」、「綜合を予期した分析」（現存在の時間性が顕著に露呈する。）「**実践を予期し、実践を充実させ豊富化する智慧**」、それが「智慧」であろう（吉田章宏）。

**「わたしが知らないのをわたしが知らないならば/ わたしは知っているとわたしは思う**

**わたしが知っているのをわたしが知らないならば/　わたしは知らないとわたしは思う**」

（レイン著『結ぼれ』、村上光彦訳、みすず書房、1973年、94）

　ピアジェが引用したポアンカレの言葉。「**科学は、連続を不連続に、不連続を連続にする**。」これも、「世界の分節化と統合化（≒構造化）のことを、言っている」と、私は考える。「連続とされているものを不連続に」、「不連続とされているものを連続に」、そして、そのように、「世界と私（＝自己）」の分節化と統合化を行うのが「科学」であって欲しい、という願いとして、私は理解する。　集合論の構造化と類別化に、その構造が定式化されている。それはまた、「同一と差異」の弁別（類別化・分節化）である。**「同じものは違うもの、違うものは同じもの」**である。それは、新たな視点を導き入れて、新たな世界を拓いて見せる、ということでもあろう。

**シェークスピア「いいは悪いで悪いはいい」（小田島雄志訳、マクベスの魔女の言葉）“Fair is foul, and foul is fair:”W. Shakespeare, *Macbeth*）　白隠・メビウスの帯、「表が裏で、裏が表」ということがある。分節化の柔軟化。**

　心理学には三つある：「我による『我の心理学』」、「我による『汝の心理学』」、「我による『誰彼の心理学』」

## 「科学」という言葉に惑わされて、それぞれの「科学」が、限定された、特定の「我による――」あるいは、「我々による――」であることを、決して、忘れてはならない。「永遠の真理」としての固定的な「心理の真理」は存在しうるか否かについては、熟慮を要する。それが「永遠」であるとすることには、深刻な「矛盾」の可能性が秘められている。「科学」という言葉の麻酔、酔うべからず。　人間科学としての心理学は、三つの心理学の連続化と不連続化を超えた統合的学問としてのみ、成立するであろう。そのことの自覚が、これまでの心理学には欠落していた。（吉田章宏）

　夏目漱石　「兄さんに対して僕がこんな事をいうと甚だ失礼かも知れませんがね。他（ひと）の心なんて、いくら学問をしたって、研究をしたって、解りっこないだろうと僕は思うんです。兄さんは僕よりも偉い学者だから固（もと）より其処に気が付いていらっしゃるでしょうけれども、いくら親しい親子だって兄弟だって、心と心はただ通じているような気持ちがするだけで、実際向うとこっちとは身体が離れているとおり心も離れているんだから仕様がないじゃありませんか」／「他の心は外から研究は出来る。けれどもその心になって見る事は出来ない。その位のことは己（おれ）だって心得ているつもりだ」／　兄は吐き出すように、また懶そうにこういった。

（夏目漱石『行人(＝旅人、こうじん)』岩波文庫、１３０－１３１ページ）

**「我という人の心はただひとりわれよりほかに知る人はなし　谷崎潤一郎」**

**「人おのおののこころ異なりわが歌やわれに詠まれてわれ愉します　窪田空穂」**

**「身のうちに未知の世界を見ることを　歓びとする悲しみとする　竹久夢二」**

**「人はひと吾はわれ也とにかくに　吾行く道を吾は行くなり　寸心（西田幾太郎）」**

**「世の人は　我れを何とも言わば言え　我が成す事は　我れのみぞ知る　坂本龍馬（十六歳）」**

**「今までは人の事だと思つたにおれが死ぬとはこいつ堪らぬ　蜀山人」**

**「見舞いたる友には癌と言いし夫のなどて吾には言わず逝きにし」**

**「癌を知りゐし夫なれば共に手を取りて嘆きしものを今に悔みぬ　和田谷春江」**

**パスカル「人は精神が豊かになればなるほど、独特な人間がいっそう多くいることに気がつく。普通の人たちは、人々の間に違いのあることに気づかない」**（『パスカル』前田陽一編、世界の名著29、中央公論社、65－66）

**波多野完治の言葉「偉大な人間と平凡な人間との出会いとは、・・・、われわれは、ひっきょう自分の背たけに合わせてしか他人を判断できないのである。自分の心が成長するにつれて、他人が偉大なら、その偉大さもつかめるようになる。蘆田（恵之助）流にいえば、『自己を読む』ことしか、われわれにはできないのだ。」**（波多野完治『ことばの心理と教育』全集９、小学館、198）

## 心理学においては、先ず「我（＝私、自我、・・・）」が問題。戸川行男が書いていた如くに。

## 井の中の蛙　大海を知らず　されど　井の中を知る

## 大海の巨鯨　大海を知る　されど　井の中を知らず　　求道愚童

**「・・・行動と情報処理に関する精巧な技術的諸科学は、私達の主題（私達自身）を、世界の一部として『あそこに』位置づけます。私たちは、（たしかに）部分的には、そのような対象物（客体）です。しかし、そうである前に、私達は物語を語る人、夢見る人、知覚する人、そして、もろもろの意味を創造する人です。私達は、行動と情報の諸科学が前提としている、世界のあの解釈を、創造してきたのです。・・・**」E.キーン著、吉田章宏・宮崎清孝訳、『現象学的心理学』東京大学出版会、1989、i-ii.

**ベルク「・・・ビンスワンガーの議論は結局、現象学者は、彼のまなざしを『内へ』ではなく、『外へ』向けなくてはならないというところにいたる。逆説的に言えば、真の内観は、見ることの肉体的感覚によってなしとげられる。われわれが世界を観察するときき、われわれがそこにわれわれ自身を見ているのである」**(ベルク著、早坂泰次郎・田中一彦訳『人間ひとりひとり』現代社、1976年、181)　「重要なのは、これら二つの型の現象学、すなわちディルタイ――ヤスパース型とフッサール――ビンスワンガー型を混同しないことである。」（同上書、18１）

　「物事そのものへ！」に応える二つの立場が、さまざまに分節化されている。例えば、

**伊藤整著『求道者と認識者』新潮社、1962,108「・・・大まかに言へば認識者の行きづまりは、実践的求道者の生活によらねば打開されない。また求道者は目を開いて認識者たちの指摘した躓きの石を見てから行動しなければならない。しかし、人の力は小さいものであって、一つの小さな認識に生涯をかけ、一筋の細い求道生活に命を賭すのでせい一杯なのだ」**

**文殊菩薩と普賢菩薩の対照、相対的独立、役割分担、相互補完、「善財童子求道の旅」研究と実践**

**久野収・鶴見俊輔の「自我を軸とする方法」と「世界を軸とする方法」と**

**D.M.Mackayの「行為者言語」と「観察者言語」と**

**時枝誠記の「主体的立場」と「観察的立場」と**

**三浦つとむの「現実的な自己」と「観念的な自己」の「観念的自己分裂」**

**夏目漱石の「批評的作物」と「同情的作物」と、「間隔論」：「歴史的現在」と「空間短縮法」**

**精神医学者・安永浩『精神の幾何学』の「A/B」**　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　など、など、。。。

「われわれがひどい恩知らずでないかぎり、**かの聖なる見識を築いてくれた最もすぐれた人たちは、われわれのために生まれたのであり、われわれのために人生を用意してくれた人々であることを知るであろう。**他人の苦労のおかげでわれわれは、闇の中から光の中へ掘り出された最も美しいものへと運ばれる。われわれはいかなる時代からも締め出されることなく、あらゆる時代に入れてもらえる。またもし広い心をもって人間的な弱点の隘路を出て行きたいならば、そこには自由に過ごすことのできる沢山の時間がある。われわれはソクラテスと論じ合うこともでき、・・・・・・。自然がどんな時代とでも交わることを許してくれる以上、**この短くも儚く移り変わる時間から全霊を傾けて自分自身を引き離し、あの計り知れない、永遠な、またわれわれよりもすぐれた人々と共有する事柄に没入しないでよいであろうか**。」セネカ著（茂手木元蔵訳）「人生の短さについて　他二編」岩波クラシックス、1982年、42ー43ページ

「これらの学匠たちは誰ひとり留守をすることはないであろう。**自分たちに近づく者を一層幸福にし、自分たちに一層愛着を覚えさせずには帰さないであろう。どんな者にも手ぶらで自分らのもとを去らせないであろう。夜であれ、また昼であれ、どんな人間にも会ってもらえるのである**。／誰ひとりとして君の年月を使い減らすことはなく、それどころか、かえって自分たちの年月を君に付け加えてくれるであろう。」同上／４４ページ

**知行合一、不言実行、言行一致**、など。　現象学を学ぶことに伴う、理窟屋の、口先だけの、頭でっかちになる危険。

　現象学は、知恵を与えてくれるが、智慧を保証してはくれない。それには、必要な実生活での修行が用意されていないからであろう。すなわち、前述の識別に従えば、先天的に備わっている**生得慧**，他人の教えから得られる**聞所成慧**，内的思索によって得られる**思所成慧**，修行の実践の中で得られる**修所成**慧の4種類のうち、**修所成慧が不足あるいは欠落**している、ということであろう。現象学を学ぶことは、理屈において秀でているが、実は、頭でっかちの口先だけとなる危険を孕んでいる。と、私は思うようになった。もちろん、私自身の犯す過ちの危険を含めて、自戒するところである。

**４月初め頃、文芸社という出版社から『絵と文で楽しく学ぶ　大人と子どもの現象学』文・吉田章宏、絵・西川尚武、という本を出版します。お子さま、お孫さまへの贈り物として、また、ご自身のお楽しみに、宜しくお引き立てのほどを。**

**本年6月27日（土）13時15分―14時45分、淑徳大学池袋サテライトキャンパスで、「吉田章宏ゼミナール　現象学を楽しみましょう」と題して、『絵と文で楽しく学ぶ　大人と子どもの　現象学』文芸社、2015年をテキストとして、現象学の易行道を共に歩む試みをいたします。どうぞ、ご参加ください。**

**本年元旦に、ホームページを開設しました。アドレスは以下の通りです。ご訪問いただければ、嬉しく存じます。どうぞ宜しく。**[**http://yoshidaakihiro.jimdo.com/**](http://yoshidaakihiro.jimdo.com/)

**吉田章宏　拝**

**以上**